



僕は朝が弱い。

そう言うと、誰もが意外な顔をする。

どうにも、朝早くから活動的に動く印象があるらしい。

だが実際は目が覚めてから一時間は何もできない。頭がボンヤリとして何も考えられないし、話しかけられても言葉が頭に入ってこない。そんな状態で相手が会話を強制してきたら、ポレアスらしく理不尽に怒ることもある。

ある朝、父上が唐突に僕の自室に来てガーガーと叫んだ時は、ぶん殴って追い返したこともあったらしい。それについてはよく憶えていないが……まあベッドで目覚めたことを考えると、夢だったか、あるいは殴り返されて気絶したのだろう。

だから僕の一日は自室でボーッとするところから始まる。

僕が目覚めてベルを鳴らすと、メイドたちが部屋に入ってきて、一日の支度を始める。

それを、夢うつつで眺める。

本音を言えば二度寝したいところだし、幼い頃はそうしていたものだが、そうして寝ることで失われるものがあると気づいてからは、ちゃんと起きるようになった。ボンヤリしてしまうのは、仕方ないと諦めている。

メイドたちは主人がそんな状態なのにも慣れたもので、ベッド脇に座る僕を尻目に、テキパキと服や

書類を用意してくれている。

フリフリと動く尻尾を眺めているだけで、一日の活力が湧いてくるのを感じる。

なぜ彼らの尻尾は、これほどまでに僕の視線を釘付けにするのだろうか……。

ああ、やはり獣族はいい。ポレアスの祖先が獣族をメイドにしたのは正解だ。まったく、素晴らしい偉業を為してくれたものだよ。

「旦那様、そろそろお時間が……」

メイドの一人がそう声を掛けてくる頃には、僕の目は完全に覚めていた。

着替えて、食堂に向かうと、食堂の長いテーブルに妻ヒルダがいた。

「あなた、おはよう」

「おはよう、ヒルダ」

食事は概ね家族で同じ時間に取るが、朝だけは僕が朝に弱いこともあって、時間がズれる。

ヒルダはそれに合わせてくれているのだ。

「……」

「……」

食事の静かな時間が訪れる。

貴族として当然のことであるが、我が家には食事中に無駄な会話をしないというルールがある。

アスラの下級貴族たちの中には、食事中にベチャクチャとうるさく喋る者たちもいるが、会話をする時は、そうした場を作るべきだ。それが友人同士であればパーティ会場であったり、夫婦間であれば夜の密会であったりね。何も食事中に喋ることはない。だろう？

まあ、エリスは彼らのように喋りながら食べたそうにしているけどね。



つづきは、6月23日(水)発売のBlu-ray Chapter 2 初回生産限定版
 でお楽しみください。

食事を終えた後は執務室にこもる。
 町長としての仕事は単調だ。

役人たちから送られてくる書類の内容を確認し、サインをして送り返すだけ。
 内容に問題があればその役人を呼び出すか、直々に指示を出すところだが、我が城塞都市ロアの役人たちは、僕が集めた信頼のおける者たちで、辺境の田舎町の役人にしておくのはもったいないぐらい有能な者ばかりだ。

まあ、ほとんどは訳あって王都を追われた者だ。人格に問題はない。有能な者は、時にやっかみを買
 い、蹴落とされるものなのだ。

そんな役人たちに一任しているのだから、大した問題など起きようはずもない。

一流の統治者は、問題の解決能力が高い者ではなく、問題が起こる前——兆候の段階でその芽を摘
 む者だ。

そうしていても制御不能な問題が起きるのが、王都アルスという場所だった。

僕にはその制御不能な問題を解決する能力があった。

そう思えばこそ、ボレアス家当主への未練がないわけではないが……。

しかし、現状を見るに、それが正しかったのだろうと思う面もある。

父上がゴードンを選んだのも、ボレアス家のさらなる発展を望んだことだ。

僕には、いまいち度胸が足りない。大きな問題が起きないのも、難しいことや新しいことに挑戦して
 いないからだ。予測不能な領域に足を踏み入れない。そんな安定思考では、革新的な何かは起り得
 ない。発展もない。

……わかつている。僕はこのフィットア領の城塞都市ロアの管理者ぐらいが適任なのだ。

「フィリイップ！」

書類を整理していると、父上の声が聞こえた。

特に返事はしない。せっかちな父上は、部屋に入ってからでも、部屋の前に立った時でもなく、用事が
 あると思いついた時に名前を叫ぶ。移動はそれからだ。特に急いでいるわけでも、怒っているわけでも
 ない。

そう思っていると、部屋の扉がバンツと大きな音を立てて開いた。

扉ぐらい静かに開けられないものか。執務室の扉だけで、何度修理したものか……。

そう思うが、父上曰く、こうやって思い切り開くのが楽しいのだそうだ。言ってもやめてはくれまい。
 公の場ではやらないことだけが救いだ。

「父上、いかがでしたか？」

「商業ギルドの件だ！」

「ああ」

